

渡辺克己著



第二十一章●上野かいわい②



第二十一章 ● 上野かいわい②

奥付け／デジタルブックについて

- ・石のほとけたち
- ・龍ヶ鼻
- ・あの道この道
- ・お姫さまの化粧井戸
- ・大空高く
- ・月澄みて
- ・高商生なら娘をやらか
- ・感化院
- ・そのいばらの道
- ・大中 開校
- ・県庁の鐘と「ドン」
- ・くりくり山

発刊に当たって

▽この電子ブック「大分今昔」は昭和 37（1962）年 11 月から翌 38（1963）年 12 月末まで、1 年 2 カ月にわたり大分合同新聞に 295 回連載され、連載から 20 年後の昭和 58（1983）年大分合同新聞文化センターで書籍として出版されたものを、電子ブックとして再編集したものです。したがって、文中の「現在」とか「いま」というのは昭和 37、8（1962～63）年当時のことです。▽使われている町名も、その後、街区制の変更によって連載当時とは変わっており、その場所を知る手がかりになる建物も、いまでは移転したり、なくなったりしているものがあります。このため、おもなものは各章の終わりに「注」として、昭和 58（1983）年現在の町名、場所を説明し、わかりやすくしています。

石のほとけたち

ひびわれし いしのほとけの ころもでを

つづりて あかき ひとすじの つた

歌人会津八一が元町石仏をおとずれたときの歌である。

お堂の奥で、がけからにじみ出る水のため、いつも全身にしつとりとうるおいを含んで、数百年のめい想にふけておいでになる石仏 — 岩薬師さま。おからだの一部や台座がひび破れ、くずれ落ちようとなにごともなかったように、半眼をとじてただ黙然と座しておいでになるお姿が、この歌を口ずさむごにほうふつと浮かびあがってくる。

伝によると、敏達天皇の十二年（五八三年）に百濟（くだら）の国の僧日羅がこの地にきて岩屋寺を創建し、石仏を刻んだとある。この日羅作と伝えられているものは、元町石仏をはじめ大野郡の菅生石仏、朝地町普光寺石仏など豊後南半に散在している。これは国東半島から宇佐郡一帯の仏像や寺院創建が仁聞菩薩に結びついているのと似ている。

美術史家の研究では、元町の岩薬師は平安初期のものという見方に一致している。お堂は昭和六年に高山英明さんを会長とする石仏保存会が改築したもの。堂内にかかげてある高山さんの筆になる縁起書の額も、だいぶん古びていた。

薬師如来を中心に数体の脇侍の仏さまがあるのだが、ほとんど破損してしまっている。この中の文珠菩薩のすそににじみ出てたまった水が、眼病の薬になるとかで、戦前までお水もらい

におとずれる人が多かったそうだが、もちろんいまは、そんな迷信は通用しない。水もかれてしまっている。

元町から古国府の方に回ったところにも石仏がある。一般に「元町石仏」といわれているが、ここはもう古国府だ。岩屋寺は、このあたりを中心に広い寺院をもっていたものらしく、元町の岩薬師も、その寺域内に含まれていたものだという。寺そのものは大友時代に消えて上野に円寿寺として再建されたのだから、そのあとかたもないが、磨崖石仏だけが久遠のおもかげをとどめているのである。

いま久遠のおもかげといったが、この石仏をみると、そのことばを繰り返すのにちゅううちよしなければならなくなった。なんとまあ、ひどく破損していることだろう。十数体の石仏のうち、右端の十一面観音だけがどうやらその流麗なお姿をとどめているだけ。

付近の老人の話によるとトンネルができてから、こんなに脱落してしまったのだという。なるほど久大線のトンネルが石仏の後ろを貫通しているのだ。列車が通るたびに、そのかすかな震動が石仏の表面のもろい石質を落としていったことは疑うべくもない。

若杉慧の著書「野の仏」で古国府の滅びゆく石仏をこう書いている。

「保存あるいは真贋鑑定の名においておそろしい光線や注射の羞恥にさらされないですむだけでもこの仏たちは幸福といえましょう。ものはすべて滅びないがゆえに魅力をもつものではありません。滅びて二度と還り来ぬがゆえに永遠の魅力をも

つものです。そこで私は、この磨崖石仏を「流亡涅槃仏」と名づけました」

龍ヶ鼻

上野の台地は元町と古国府の境のあたりで切り取られたように落下して、小さながけをなしている。

そのがけに磨崖石仏が刻まれたわけだが、この上野の台地の東端を龍ヶ鼻と呼んでいる。

俗説では上野の台地は延々と福岡県に伸び、久留米市の高良山を最後としているもので、これは龍のふしたものであるという。龍の頭が上野で、しっぽが高良山というわけだ。大道峠を掘り下げたのは、龍の首根っこを切ったかたちとなった。それで掘り下げ工事のさい血が流れ出たという話もある。

「臥龍」の頭と尾という関係を考えるのかどうかかわからないが、龍ヶ鼻の高良神社は、久留米の高良山にある高良玉垂神を、大友貞宗の治世に円寿寺二世月江が勧請したもの。

当時は、この龍ヶ鼻は景勝の地だったようで、「豊府紀聞」にはつぎのような表現をしている。

円寿寺の東、龍ヶ鼻は青岩がきりたつてさながら赤壁（中国湖北省にある名勝地で揚子江にのぞんでいる。蘇軾の赤壁の賦で名高い）のごとく、大河の美しい水が岸にみなぎっている。遠寺の鐘の音が雲間に響き、山の端をのぼった月が浪間に浮かび、あるいは浦頭に帰る船の帆が日にはえて、すこぶる絶景である。ここに神殿を営んで鎮守の神とした。（原漢文）

この文によると、当時大分川は龍ヶ鼻のすぐそばを青いふち(淵)をなして流れていたようである。

それよりもっと昔は、大分川は龍ヶ鼻に直接突き当たって、台地の根を洗い、絶壁を形成したものだろう。とにかく非常に風景のよい場所だったことは間違いない。いま行ってみると高良神社のちよつと先道路の東側に大きな岩が突き出ている、この岩をうがって初瀬井路を通している。この岩までが龍ヶ鼻の続きで、かつてはここにまことに姿のよい古松が枝を張っていた。人々は「龍ヶ鼻の松」と呼んでめでていたのだが、大正時代になくなった。道路はこの岩の東下を通っていたのだが、鉄道がしかれ、無粋なトンネルができ、道路も変更して、すっかり俗化してしまった。

ところで、この高良神社は「ほうそうの神さま」で名が通っていた。大正ごろまでは、ほうそう(天然痘)の流行時には「高良さま参り」がきびすを接し、ほうそうよけのお札を受けていた。

松平忠直(一伯)がその子松千代のために、ほうそう安全の祈願をした記録もあったそうだから、ご利益の歴史も古い。

ご利益といえば、百合若大臣塚は「おこり(マリア)」をなおすのに靈験あらたかと信じられていた。病人の家族の者が大臣塚に祈願して、塚の土をひと握り持って帰り、病人に知られないようにまくらの下に入れておくと、不思議と「おこり」がおさまったそうだ。

大臣塚の下に住む岡崎幸平老人の話では、たしかにききめがあったそうで、全快のお礼に小さな木製やブリキ製の鳥居を供

える人がたくさんあった。その鳥居が碑石の前にたくさんあったそうだが、いまはひとつも残っていない。

あの道この道

上野越えの峠道は、かつては戸次街道の重要な交通路だった。いまは両端が掘り下げられて、斜面がゆるやかになっているが、明治ごろまでは、登り口が急な坂道だったのである。

いま、北側の下りは大分大経済学部の南のはしあたりから、道路が両側の地面よりもずっと低くなっている。あれだけ掘り下げられたのだ。

南側は円寿寺の石段の半分から下、およそ一間ぐらいの高さが新しい。あの高さが旧道で、円寿寺のかきねにそって道が続き、そのはずれあたりから、にわかになりとなっていたものでその急坂を「あぶみ（鏡）坂」と呼んでいた。

山南地帯から府内に入るには大道の掘り切り峠か、この上野の峠が主要交通路だった。山村と府内の往来は、たいてい農産物や日用雑貨の重い荷の運搬だ。この峠で、どれほど難渋したか想像にかたかない。

ところで、上野の峠の場合はちよつと回り道をして元町を通れば、困難な坂道に馬も人もネをあげなくてすむはずだし、昔の人に、その才覚がなかったとは思えないのだが、どうして元町回りの道路がなかったのだろうか。ちよつと不審である。

やはり、前回にもふれたように、竜ヶ鼻付近に大分川が深い流れをなしていて、あの台地の端を回ることはほとんど不可能

に近かったのに違いない。それもごく近い年代までそうだったのではなからうか。

上野の峠の頂上に当たるあたりから東にわかれた細道があった、この細道が台地のはずれから、だから下りで元町におりられた。

下りたところが石仏の岩薬師さまのすぐ横。いまもこの道はあるのだが豊山寮（戦時中に軍の施設のあったあとで、現在はその施設をそのまま使ってゴミ・ゴミしたアパートとなっている）の中を抜けてゆかねばならない。上野の峠道とともに生まれた古い道に相違ないが、忘れられてしまっている。

もうひとつ、上野の峠から元町におりられる古い道があった。それはいまの経済学部の中を通って、大分の町を左手に見おろしながら元町の北のはずれ付近にくだっていたのである。上野、元町間の大切な連絡路だったが、大正十一年に開校した大分高等商業学校（現経済学部）の敷き地にとられた。

上野と元町の人たちが、これでは便利が悪いというので、代替地として大分高商の南側のさくの外にそった土地をもらって新しい道路を開いた。現在の「あけぼの寮」下を通っている道がそれだ。

上野峠近くで畑仕事をしていたおばあさんが、昔の坂道を思い出してこう話してくれた。

「いまの若いもんは、こげな峠を越すのさえひどがるけれど、昔はひじい坂道で息が上がったもんじゃ。百姓家がとぼんとぼんと道のかたつりいあつただけだから、キツネやタヌキが出るような寂しい暗い道でなあもし…」。

お姫さまの化粧井戸

古いものは、ひとたび破壊すればもう返ってこない。しかも消えたものほどなつかしい。

ことさらに取りこわさねばならない理由があったわけでもないのに、無造作に取りこわされたものが二つある。お姫さまの化粧井戸と、くりくり山だ。二つとも重要な文化財というほどのものではなからうが、やはり郷土史のうえでは一つの資料だし、だいいちわれわれの祖先の体臭がしみついたものだ。せっかく数百年の星霜を傷つけることなく残されてきたものを、こわしてしまふこともなからう。

お姫さまの化粧井戸は、別名を千貫井戸と呼んでいた。上野の峠を登りきって、いまの豊山寮の方へちよつとはいった道の左側の小野家の庭のすみにそれはあった。

大友氏が上野に屋形をかまえて威を鎮西にふるい、海外との交易の門戸を開いて、わが国の文化にさきがけていたころ、屋形の「ご用水」として朝夕使用されていた井戸と伝えられていた。

お屋形のお姫さまがお化粧をする水として、とくにこの井戸の水を愛され、わざわざくみにきたといういい伝えもある。「ご用水」というよりこの方が、なまめかしい色彩をはなつ。

お化粧するには、水をより美しくしたい。井戸に黄金を入れておけば、もっと美しい水になる、というので千貫の大金を井戸に投げ入れさせた。それで「千貫井戸」と呼ぶようになった。あるいは上野の高台では、良い水を得る井戸を掘るのはひとと

おりの苦労ではない。大友氏は屋形の東南にあたるこの地を適地に選んで千貫の巨費を投じて井戸を掘らせた。それで「千貫井戸」とも伝えられている。

六角形の切り石にたたまれた底も見えないほどの深い井戸だった。つぶされるまでは、井戸の周囲にはツバキやウシノミなどの樹木を植えこんで、近寄れないようにしてあり、そのかたわらには小さなほこらを建ててまつてあったという。

「井戸にさわったり、まわりの木を折ったりすると腹がセク（痛くなる）と年寄りからいわれていた」

と、近所のおばあさんが説明してくれた。そういういい伝えによって井戸はこわされることなく数百年を保存されてきたのだ。

太平洋戦争中、上野に軍が多くの施設を建てた。その一つの豊山寮へはいる道を設けるさい、道すれすれにある千貫井戸が邪魔になるといので惜しみなく打ちこわしてしまった。

そのあとでも見たいと案内してもらったら、驚いた。現在は小野家の隣家の土地になっていて、その上に便所が建っていた。

くりくり山

古い大中卒業生なら、グラウンドの東北のすみ、校長舎宅になつている場所にあつたくりくり山を、なつかしく思い出すだろう。

伝説では、百合若大臣に殺された逆臣別府兄弟の墓所と伝えられている。また百合若大臣が愛馬をつないだ所で、この馬は、

大臣が玄海島からみすぼらしい姿で帰ったとき、大臣をおぼえていて涙を流していなないたなどという話もある。

くりくり山は、大正四年版の大分市史にその写真がのっている。樹木がうっそうと茂っているので小丘の形はさだかでないが、グラウンドと校舎の間に伝説の小丘が濃い緑をしたた

らせている姿はまことに好ましい。

くりくり山を知っている人の話によると、円墳状に丸くふくれあがった丘で、高さは五間ぐらいあった。クスやカシなどが茂って夏の日ざかりには、学生たちは、この茂みにもぐり込んで涼をとっていたそうである。

上野の台地の平たんな場所に、持ってきて置いたようにふくれ上がっている小丘は、昔の人も関心を寄せたものと見え、古い文書にも「クリクリ山」または「栗々山」と呼んで、これについての考察をしている。

それによると、上代貴人の墓ではなからうかとい、あるいは、大友屋形からわずか三、四丁しかはなれていないところから考えて、大友氏の馬場であって阿南庄上市村（現挾間町）に



くりくり山の古井戸（挿絵：田中昇）

ある茶臼山のどとく馬術調練のために築いたものかもしれない
といっている。

大分市史（大正四年版）には「上古よりこの台地に散在する
古墳の一つなるべし」と記している。

いずれにしても人工の山であったことには間違いない、大分
の歴史を語る一つの資料であり、親しみのある小丘であったの
だ。

昭和初年にこのくりくり山を調査した郷土史家が「古蹟研究」
という本に「俗吏の手によって、この豊かな伝説的色彩をもつ
小丘が残るところなくくずし去られたのはまことに惜しむべき
ことである」と憤慨している。

いつ消えたのか調べてみたら、大正十二年（大分中学校の池
上庄治郎校長が辞職し、中津中学校から裏川寅藏校長が転任し
てきた四月）にくりくり山をくずして、その跡に校長住宅が建
築されたと大分中学校史に記してあった。

学生たちは、くりくり山をこわすことには大反対だった。「家
を建てる草っ原は他にいくらでもある。たかが校長住宅のため
に、歴史あるものを消し去るべきでない」と抗議をし、あわや
ストライキというところまでいったが、うまくなだめられ、抗
議はやむやにされた。

このくりくり山の頂上にあつた石塔が宝戒寺の金堂前に置い
てある。当時の住職が、くりくり山をこわすさい粗末にならな
いようにと持ち帰ったのだそうで、その石塔には「享保十二年
の建立、別府兄弟の基と伝えられるここに石塔を建てて菩提を
とむらう」という意味のことが刻んである。

大正時代まで上野一帯のこどもは、こんなわらべ歌をうたっていた。

太郎坊次郎坊馬どこにつないだ

くりくり山につないだ

何もつてつないだ

去年のアワがら、ことしのヒエがら

くりくりまぜて見たら

くり一つ拾った

摘み割るも惜しさ

かみ割るも惜しさ

摘み割りかみ割りしてみたら

稚児のような子供が出たよ

“大分”開校

大分県の政治経済を陰に陽に動かしてきたものは大分中学校（現上野丘高校）卒業生であった、といつていいだろう。これから先のことはわからないが過去はたしかにそうだったと自他ともに認めているはずだ。

明治十八年、大分中学校が生まれたとき師範学校とともにそれは大分県の最高学府だったのだ。古風な表現を借りれば、青雲の志をいだいた県下の秀才がここに集まってきたのである。

開校時は現在の県庁舎のあるところに師範校と同居。村上山長初代校長も師範の校長を兼務して大分中学校の歴史が始まった。

村上校長は一年ぎりで玖珠郡長に転出していったが、この人のむすこが村上巧児さんで、やはり大中に学び、十期卒業生として、その秀才と、わんぱくぶりの名をとどめている。

二代校長は、後に文部大臣となった鎌田栄吉さん、この人は和歌山県の人で、福沢諭吉の高弟として出色の人物だったらしい。大中校長に赴任してきたときが二十八歳（当時は数え年だから当世風にいえば二十七歳）の青年。校内の全教師の中でも最低の年齢だったそうだ。

しかもよほどかわれていたものとみえ、月俸百円だったという。当時郡長でさえ五十円の月俸が最高だったのだから、これは破格の待遇だ。百円を現在の価値になおすと、おそらく四、五十万円になるのではなからうか。

当時いかに教育を重要視し、良師を求めるに消費を惜しまなかったかを語るものだ。当世とは官民をあげて気概が違っていたのだ。このことは、鎌田校長がアメリカから英語の教師ウェインライト先生を雇ったとき、自分の月俸の倍額二百円をポンと出していることにもうかがえる。

だから教育にも気合いがはいっていた。開校の年の入学者は、七十人だったが、第一回卒業生は三人となっている。いかに教育がきびしく、脱落者が続出したかわかる。もともと最初はその内容がわからず志のあるものがどつと押しかけて、たちまちふるいにかけられたのだろう。後にはしだいに落ちついて脱落者は減っている。

開校の年に制定した帽章は正方形の中に「中」の字がはいった単純なものだった。例のサクラの中に「中」の字のなつかし

い帽章になったのは、明治二十一年衣斐鉸太郎校長のときだった。このときに黒ラシャ（夏は白小倉）の五つボタンの制服も同時にきまった。もともと、洋服の場合は、これ、と指定しただけ、着物でもよかった。ただし、着物の場合は筒そでにハカマでなければならぬという規定があった。

西郷さんから借りてきたような服装の腰に「火の用心」と書いたたばこ入れをぶら下げた豪傑もいて新人生のどぎもを抜いていたそう。明治時代は喫煙は許可されていたのである。

大空高く月澄みて

上野に大分中学校（当時は大分尋常中学校と称していた。尋常小学校にたいする尋常中学校だ）が新築移転したのは明治二十七年、金子銓太郎校長のときだった。

人家もまばらな上野の台地にそそりたった大中校舎の威容は、府内のどこからでも望まれた。文部省直接の設計監督で文部省技師久留正道という人が出張してきて建築の指揮をしたということだ。工費総額は当時の金で二万二千五百余円かかっている。文部省はこの校舎を「全国中学校の模範」の折り紙をつけ、その校舎図面を内国勧業博覧会に出陳したというから、生徒はもちろん、大分の人々は「たいしたもんじゃろうが」と鼻を高くして、威風あたりをはらう上野の学舎を仰いだのだった。

なにしろ大中は師範と並んで大分県の最上級校であることは前にも書いたとおりで、県下全域から生徒が集まるのだ。交通の便が悪いからそのほとんどは寄宿舎入りで、いよいよ入学の

ため郷里を出発ということになると「大分中学校へ遊学を祝す」と旗のぼりを立てんばかりのさわぎ。近隣の者が集まって壮行会を催し「男子志を立てて郷関をいず」てな文句をうたって「遊学」の決意をみなぎらせたものだそうである。

近いところのものはむろん通学だが、近いといっても鶴崎あたりも通学の範囲だ。いまどきのこどもは一、二キロでもバスだ自転車だと自分の足を労するのをいとうが、鶴崎の三佐くんだからも徒歩で上野に通学して「ヨダキイ」などひとこともいわなかった。

校歌も詩情にあふれる雄大なものであった。

「大空高く月澄みて、雲吹きすさぶ秋風に…」とか「汝が住めるこの国は汝が祖先の墳墓ぞや、昔ながらに照る月をいかにとか見る吾が健児」あるいは「為すことなくて朽ちもせば、地下の祖先に恥なるぞ奮えや奮え吾が健児……待てる英雄誰なるか、待てる豪傑誰なるか」

といった歌詞に、若い血はいやが上にたぎらざるをえなかった。

この歌詞に象徴されているように気概もあり、うつぼつたる大志を胸中にもやして勉強もしたが、一面ちゃめつ気もあった。寄宿舎の恒例行事に試胆会というのがあった。深夜宝戒寺の裏の墓地に出かけた柴田基二という豪傑が、野天で火葬をしていた死人の骨を二、三本持って帰ってどぎもを抜いたそうだった。これは問題となり新聞ダネにもなつて、停学や謹慎など約二十人が処罰を受けたという。

学校の裏山に、生徒を相手にするうどん屋があつて、一杯一

銭の熱いやつをすすめる快味を味わうために、かきねの土手を乗り越える連中がわんさとあった。ために、そこだけが草もはえなかった。土手越えの先べんをつけたのは村上巧児さんだそう
だ。

なにしろ大中のことを書きだしたらきりが無い。明治時代の印象にちょっと触れた程度にしておく。

高商生なら娘をやるか

大分高等商業学校（大分大学経済学部の前身）が開校したのは大正十一年。上野台地の広い畑地をつぶして専門学校がいら
かを輝かせたのは壯観だった。

なにしろ県庁所在地で市にもなっていないなか町は全国にもまれな存在といわれていたのは、それよりほんの十年ばかり前のこと。市に昇格したとはいっても中心街はまだ、江戸時代のおもかげが、はばをきかせているありさまで、近代的な建てる物といえれば銀行と県庁舎ぐらいなものだ。そんないなか町に、まるで場違いのような専門学校の出現だ。

政府の高等諸学校拡張計画の一環として生まれたもので、大分は第八高等商業学校に当たるのだそうである。最初、大分に
高等学校、福岡に高等商業学校を設ける政府の構想だったのを福岡の方で大学の予備校たる高等学校を熱心に希望したために大分に高商がくることになったのだという。

開校の翌年文部大臣鎌田栄吉さんが高商を視察にきている。鎌田栄吉さんは大分中学校の二代目校長だった人だ。さぞ胸中

感慨無量で上野に車を走らせたことだろう。

第一回入学生は百五十数人。志願者千六百人の中から合格したのだから、厳選された秀才たちだ。それに高商学生はお金持ちの子息が多いといわれていた。秀才でお金持ちときているのだから、大分の娘たちにとってはあこがれの貴公子にみえた。「高商学生なら娘をやるか」の気風が大分高商をふんわかと包んだのもむりからぬこと。

ところが、第一回卒業生を送り出すころは、世をあげて就職難のいがい波に洗われていた。

卒業式までに就職が決定したのは二十人足らず。大学に進む者十人内外を除くと、百二十人ばかりは卒業と同時に失業者とあいなった。

この第一回卒業生のひとりが現在大分大学学長となっている草場勇さんだ。

この就職難——世界的不況の暗い谷間は昭和初年までずっと続いた。当時「大学は出たけれど」という就職難を風刺した映画ができたことを記憶している。

大阪の目抜き通りを、ある高商卒業生が「高商卒業生・職を求む」のプラカードをぶらさげて、サンドイッチマンよろしく歩き回ったという話題が新聞にのったこともある。

それから満州事変、日中戦争、太平洋戦争と日本経済は軍需景気にささえられ、高商卒業生も大陸に活躍した。そして大分での高商生の生活にも幾多の変遷がありながら、大分の文化の一つのシンボルであることに変わりはなかった。

戦争末期に経済専門学校と改称、戦後大学となった。最近

経済学部卒業生は売れて売れてしようがない。鼻歌で就職している。いい時代になったものだ。

感化院そのいばらの道

変電所のうしろを宝戒寺の方に登る道は、昔は上野の主要道路であり、大分中学校への大切な通学道であったことは前に書いたが、一時期、女どものひとり歩きはあぶないといわれる、困った道になったことがある。

一般に「感化院」と呼ばれる不良少年収容施設が上野にできからだ。

「感化院」が大分県にできたのは明治四十一年。西本願寺派寺院団体が慈善奉公会を組織し、「感化院法」によって県の補助を受ける代用感化院「循誘学館」を、鶴崎の鉄砲町に創立したのが最初。初代院長には鶴崎の教尊寺住職藤音晃超さんがなり、不良少年の教化に当たった。

なにしろまだ青少年問題が社会問題として科学的に検討されるにはほど遠い時代だ。とにかく町の持てあまし者を一カ所に集めて宗教家が善導につとめるというにすぎない。町の人々も、悪いこどもは感化院に追いこむといったような、単なる隔離施設ぐらいにしか考えていなかった。

いたずらの度が過ぎると、

「こげな悪い子は感化院にやっつけてしまおう」

と、親からおどされた記憶が私にもある。だから感化院といえよほど悪いこどもが入られる恐ろしいところという恐怖

心がしみこんでいた。

そういう社会の感化院観が、収容少年をいつそうゆがめただろうし、事実ほんとうに悪いこどもが集められていたので、当事者の手におえなかつた面もあつたようだ。

大正二年に鶴崎から上野に移つてからは、収容少年たちは自由に施設を抜けだし上野一帯にのさばつて悪さをしていた。

農家から二ワトリを盗んできて居室の天井裏ですき焼きをやっているのを見つかつたなどというしたたか者もあつた。

こんな連中が通学道に待ちぶせてケンカをしかけたりしたのである。大分中学校のグラウンドで少年野球をよくやっていたが、ゆだんをしていると、選手が脱いだシャツやゴムぐつを盗まれた。そこで選手やその仲間たちが、しかえしに感化院の少年とケンカをすることもたびたびのこと。町の人から「不良少年養成所」の悪名をちようだいしたこともある。

昭和十二年に県立に移管して少年教護院となり、十七年に「二豊学園」と改称した。そのころからしだいに施設としての内容も完備し、教護も行き届くようになった。上野かいわいの大そうじのさいは学園のこどもが手伝いに行くといつたような、なごやかな風景もみられた。

しかし上野が農村地帯から住宅地帯に変容したために、三十六年に鶴崎の小池原に引き移つていった。

先日上野の二豊学園跡に行つてみたら、広大な敷き地は近代的な住宅が建ち並んで、すっかり見違えるようになっていた。なごりといえ、敷き地をめぐるコンクリートのへいだけであつた。

県庁の鐘と「ドン」

こどもが外から帰ってきて、「昼ごはん、まだ？」というとき「まだドンにならないじゃないか」と母親にたしなめられるといったように、「ドン」が正午の代名詞になっていた。なつかしい大正年代の思い出だ。いまの墓地公園の下、あの谷になっているところを、「一の谷」と呼んでいたが、あの一の谷の横を上がると火葬場があり、その上の台地を「坊主山」というていた。あの坊主山一帯が現在墓地公園となっているわけだ。「ドン」と市民に親しまれていた正午の時砲はこの坊主山で鳴らしていたのである。

台地の一部を平らにならして軍から払い下げを受けたらしい小型の大砲が北向きにすえてあった。正午前になると、市役所の係りの人が火薬を持って、えっちらおっちら坊主山に登って行ってドンを鳴らしていたのだった。

このドンは遠く桃園の民家まで聞こえたそうなので、桃園の人の話によるとドンが鳴ると時計を合わせていたが、一分ぐらい進ませて合わせたそうだ。上野から桃園かいわいまで音が伝わるのが一分ぐらいとみていたのである。

ドンを鳴らすようになったのは大正三年一月一日から。それまでは県庁の鐘楼で時鐘を打っていた。その鐘楼は府内城大手門（旧県庁正門）の上にあった。藩政時代から火災、災害などの場合の警鐘のほか、時鐘として使用していたものらしく、大分の町の人々にはなじみ深いものだった。

時鐘は朝六時から、夕方六時まで、一時間ごとに打っていた。まずゴン、ゴン、ゴンと三つ打って、それから六時なら六つ。

七時ならば七つ打った。最初の三つを捨て鐘といい、これが時鐘と他の鐘との区別となった。大分の町の人々は時を知らせる県庁の鐘で、時間生活の折り目をつけていたのだった。

この県庁の鐘の打ち手は、いつも正門にいかめしく控えている門衛で、御手洗甚太、松浪伝三、鈴木三平といったような人がいたが、中でも御手洗甚太さんが最も有名だった。

北は県庁鐘つき堂 御手洗甚太が鐘をつく

こんな歌さえ市民にくちずさまれていた。この人は剣道にすぎれた人で県知事官舎の長屋門に住んで用心棒ともなり、警察官教習所の剣道師範の助手もしていた。

県庁正門の門衛はなかなかきびしくて、だまって門を通ろうものなら「どこに行くか」と大声しつ呼されたものだ。県庁の役人は当世のように公僕ではない。高いところから人民どもをへいげいしていたのである。しかし時鐘だけは親しみがあつた。

明治四十一年に南大分と西大分が大分町に合併して境域も広くなり時鐘の効果もうすれたので市政施行後、全国各都市に見習ってドンを採用、時鐘はお役ご免となった。この鐘はのちに警察に持つていって警鐘に使用されていたが戦時中に徴用されたらしい。鐘には大給の紋どころが刻んであつたそうだから、どこかにあればわかるはずだ。

サイレンがドンにとって代わつたのは昭和三年である。

(注)▽大分大学経済学部の旧位置は上野丘東で、現在、県立

芸術短大、同付属緑丘高校になっている。



オオイタデジタルブックは、大分合同新聞社と学校法人別府大学が、大分の文化振興の一助となることを願って立ち上げたインターネット活用プロジェクト「NAN-NAN（なんなん）」の一環です。

NAN-NAN では、大分の文化と歴史を伝承していくうえで重要な、さまざまな文書や資料をデジタル化して公

開します。そして、読者からの指摘・追加情報を受けながら逐次、改訂して充実発展を図っていきたく願っています。情報があれば、ぜひ NAN-NAN 事務局にお寄せください。

NAN-NAN では、この「大分今昔」以外にもデジタルブック等をホームページで公開しています。インターネットに接続のうえ下のボタンをクリックすると、ホームページが立ち上がります。まずは、クリック！！

デジタルブック版「大分今昔」 第二十一章 ●上野かいわい②

2008年1月4日初版発行

筆者 渡辺 克己

挿絵 田中 昇（着色：佐藤 克治）

編集 大分合同新聞社

制作 川村正敏／別府大学メディア教育・研究センター 地域連携部

発行 NAN-NAN 事務局

〒870-8605 大分市府内町 3-9-15 大分合同新聞社 総合企画部内

© 大分合同新聞社

著者略歴◇渡辺克己

大分県大分市佐賀関町木佐上出身。大正二年生まれ。朝鮮京城で新聞記者。終戦で引き揚げ、大分合同新聞記者。こども新聞、学芸部等の部長を経て調査部長を最後に昭和四十三年定年退職。昭和二十七年から同四十二年まで大分市教育委員、昭和四十三年から同四十八年まで民生児童委員。
郷土史を研究し「大分今昔」「豊後のまがい物散歩」「国東古寺巡礼」「忠直卿狂乱始末」「真説・山弥長者」「豊後の武将と合戦」「ふるさとの野の仏たち」等の著書。